

#### 04 魔法のステッキでアナル開発コース

「この前はお楽しみでしたね。プリムちゃんにも大好評で、彼女、プレイのビデオを……まあ、それはおいておいて今回はっ」

「もっと変態なプレイですね、ではこちらのコースはどうでしょう」

「人格は前回の調整と同じで後ろの開発を、彼女の魔法のステッキもこのように改造していますので、今回は催眠で……ふふふ、お気に召したようで何よりです」

「は、はい、」指名ありがとうございます」

「ほう、もちろん変身済みで、言われたとおり魔法のステッキも持ってきたわよ」

「え、そんな……ほんとにやるのっ!」

「うう……もちろん指示どおりに準備はしてきたし」

「こわくなんてないけど」

「あんた、わたしが逆らえないって知ってるでしょ、卑怯よ」

「どう準備してきたか、言わなきゃダメ……っ」

「あんた、絶対楽しんでるわよね、変態、ホント変態なんだから……敵だったらこのステッキでボロボロにしてやるの!」

「うう、手が自然に、ミニス力をまくりあげて、お尻突きだしのいやらしいポーズ取っちゃって」「じろじろ見すぎよ、」の雑魚戦闘員、さっさと済ませるから」

「ショーツのクロッチをずらして……見てください。おっ、お言いつけどおりに、しっかりとお尻の中、洗浄してきましたあ♡ですから、きれいな私のケツ穴を楽しんで頂けますっ♡」

「!」わで、いいのよね」

「お尻の奥まで、すっすっして顔から火が出てっ……ニタニタ笑って、ふざけたこと言わないでっ!」

「こんな変態行為、慣れるわけ無いでしょ!?! おしりを突き出して、こんな恥ずかしい格好させっ」

「な、何、言ってるのよっアナルで感じさせてもらってるだなんて、そんな下品な期待なんて、してないんだから……っ!」

「わかってるわよ。もちろんお尻の穴を責められるなんて、初めてだけど、全部、知ってるのよ、あんた達の組織が私に汚らわしい記憶を書きこんだからよ」

「じゃ、行くわよ。せ、セイントステッキ、モードチェンジっ！魔法のアナルビーズ、うう、わたしのステッキ……こんな変態行為に使うなんて……うっさい、この変態め！き、期待なんてしてないわよ!? 変態ー！」

「フーフー♡ ショーツに手が、ん、んんっ。ほんとにずり下ろしちゃってるっ……うう、恥ずかしい……」

「は、鼻息……ひゅっ♡ あ、あんっ……そんなっ……お、お尻の穴あ、舐めないでえ……」

「あふ、んふう、くふうッ、」

「おしりなめられてるっ……わたしおしりなめれてっ、んあっ……ぺろぺろっ、変態っ……なんでこんな変態なことっ、ひあっあ……」

「くふ、はふう……お尻の穴、拡げられて、んう、んうっ、んふうっ……♡ 奥まで舐めてるのわかるッ♡ んひい、くひい♡ んいッ♡」

「はあっ、んあっ……あ、あっ、んああっ!」

「……はあはあ、や、やっど解放された……お尻、こんなに感じるなんて……し、知らなかった……知りたくなかったよう、こんな変態なことお……」

「わ、わたしのステッキ、ああ、お尻なめた舌でなめるなあ……ひあっ、てらてらになっちゃったわたしのステッキ。い、入れるの……ほんとに入れちゃっのっ」

「フーッ、フーッ、あ、あつたてる……ゆっくり、んあッ、んあおお……奥までビーズ、どどんとんっ、潜っていつちやうっ……」

「しょんなあっ、こんなっ……あお、あおっ、おほおおっ……さっきほへされたせいで、んう、んうっ、太いビーズも、お、おおっ、おふうッ、中にずるるっ、一気に入っつていっつてえ」

「んお、んおお、ステッキ抜き差ししないで、そのままでも、充分クルのにい、んお、んおおッ♡」

「え、あ、き、気持ちいいか、って？ そんなの、どうして言わないといけないのよっ、お尻の穴がいいなんて、へ、変態丸出しじゃないの」

「このプリム・ポジションがそんな変態みたいなこと……い、言っわけないじゃない、お、おおっ、おほおッ♡」

「そんなにずぶずぶっ、それえ、押し込まれたらあ♡ お腹の中、ビーズでいっぱいのお♡」

「こんな、く、屈辱的なことされて、はあはあ、悦びわけなんてないでしょ」

「なんで、そんなにニヤニヤ笑ってるのよ。わたしの気持ちを見透かしたみたいな顔して、また奥っ、ステッキでグリグリして、んい、んい♡ んいおおッ♡」

「ち、違うから、わたしは変態じゃないもん」

「アナルを責められて、よ、悦ぶような、そんなマジじゃ……せ、正義の魔法少女、あひっ、だからッ、お、おおッ♡」

「ぜ、全部入っちゃったあ……ハッ、ハアッ……おなかぱんぱんなのに……んあっ、わたしのステッキなのに……ひう、んっ、こんな、こんなの……んお、んおおッ、んおほおッ、だめっ、魔法のす、ステッキでお腹つくちゅくちゅしちゃ、だめえ!？」

「魔法少女の神聖なアイテムで……なにこれ!？」

「んおほお、んっ……ひあっ♡……ぞくぞくしちゃうのおかしい!？」

「い、いつひやったあ……魔法少女なのに、お尻で感じて……変態、こんな変態みたいに……はあ、はあ……も、もう終わり？ ふ、ふんっ、大したこと……え、抜く、そ、そうよね……入れたままじゃ……あ、ちよつとま」

「んひいつ!？ ぎゅぽんっつてえ、ビースが1個1個、んあ、んお!？」

「抜けちゃう、抜けちゃう!？」

「もっとゆっくり……んひいいい……」

「お尻のいりぐじめくれるの!？ おひい!？ 1個抜けるたびにイっちゃう!？ んあ!？ んんうっ♡♡」

「お尻の穴の感じがやすいところ、いっぱいゴリゴリされえ♡」

「お、おお、おおおッ、イグイグイグ、アナルイグう♡」

「ビース引き抜かれて、盛大にいつべうーッ♡」

「おっほおおお——ッ♡♡」

「はひ、はひい……い、いつちゃったあ……お尻の穴で、何回もイっちゃった……わたし、正義の魔法少女のはずなのに、ごんごん変態にされてく、嫌なのに、嫌なはずなのに」

「んあ、お尻、まだなにか入ってるような感じするの……」

「はあ、はあ……はあっ……ひあっ!？ っく、勃起ちんぽなんていきなり突き出されたら誰だってびっくりするわよ……フッ、フッ……ホントガチガチに勃起しちゃって、匂いも、そ、そんなにわたしのお尻いじめるの興奮したの?？」

「本当に節操ないチンポね。わたしのステッキのビースより太くて、ごっくっ、こんなのこんなの……へ、も、もちろんつけるわよ、コンドーム……直接なんてだめなんだから」

「ん、んんっ。熱い、ゴム越してもわかる……ふあ、ぞくぞくとドキドキが、な、なんでも無いわよねー」

「また四つん這い、こんな獣みたいな格好で……お尻丸見えなのに……恥ずかしいのにわたし、わたし……あん、あんんッ、後ろの穴にッ、先っぽ、擦りつけてきて」

「んっ、んんっ、んんんっ……♡」

「入れるならナッナッとしなさいよ」

「んあ、んあふっ……」のまます殺しなんて、いや、いやあッ……ひと思いに、入れてえ……」

「うっ、あ……その……」

「これは、あんたのチンポ、欲しがってるわけじゃないの、焦らされるのが、落ち着かないだけだからッ」

「んお、んおお、そんな急にい、奥までッ……心の準備がッ♡」

「お、おほおおッ、ビーズと全然、違ううう……♡」

「ぶっといオチンポで、お尻の奥まで、拡げられてえッ♡ザ」戦闘員につ、こんなこんなけだものみたいにつおちんちん付きこまれてるのに!? 気持ちいいのがとまらない♡!?」

「んい、んいッ……さ、催眠のせい、これは催眠とか洗脳のせいだからッ♡ あひっ♡!?」

「あちゅあちゅのおちんちん入れられてえ、よがっちゃうのは仕方ないのおっ♡♡♡……!」

「はひ、はひはひい、あひい……あふはああ……お、おお、おほおッ、ずばずばッ、お尻の中、混ぜながら乳首、抓らないで、んい、んいッ、変な声出ちゃうッ♡♡んひおッ♡」

「両方の乳首ッ、同時に引っ張らないで、んあ、んあひッ♡ くひッ♡」

「お尻を変態戦闘員の変態おちんぽに犯されながらおっぱい、責めるの、ダメ、ダメえッ、反則すぎらのお♡」

「わたし、変態になっちゃうう♡♡ お尻もおっぱいもいじめられて喜ぶ変態♡ いやあ♡ 魔法少女に戻れなくなっちゃうう♡」

「悔しいのにつ、あひいん♡ 気持ちいいのが♡ んお♡ 頭の中塗りちゅぶして♡ ためため♡ だめなの♡!? お尻と乳首い、いっぱいイジメられてえッ、イグ、イグッ♡」

「んお、んおお、んおっほおーッ♡♡」

「い、イってる♡ お尻の穴、エッチな穴になっちゃったあ♡ おちんぽ専用穴♡ ひあ♡ あ♡ あ♡ んあ♡!? “ん”んッ♡」

「出したり、入れたりい!? 早くなつて、んひい♡ だ、出すの!? わたしのお尻の奥にザ」戦闘員のくっついたごころの精液出しちゃうの♡」

「おひっ♡♡♡♡!? 一番奥まで♡♡ あ♡♡ ああ♡♡ 出てるう!? あっちゅいせーしパンパンに」コンドーム膨らませてるのがわかるッ♡」

「はあ、はあ……んあッ♡」

「ぬ、抜けちゃった……お尻まだポッカリ開いてるう、戻らなくなったらどうしよう……ひあッ……ゴムの先っぽにたっぷりと、せーし溜まって」

「たっぷたっぷして……わたしのお、お尻の中に入ってたものに、そ、そんなもの、い、いらないわよ♡」

「え……な、ナマでって、そんなお尻よ!? ダメ、ダメに決まってるじゃない……うう、わたしが断れないの知って……こんな、勃起おちんちん……ナツキ出した精子でどうぶつにぬれててかてかガチガチのステッキより太いのお♡」

「はあはあ、おかしくなっちゃうから……お尻に生でなんて、そんな変態な♡♡」

「わたしおかしくなっちゃう♡♡ 変態になっちゃうから♡♡」

「き、期待してるわけじゃないから」

「お尻の穴がヒクヒクしてるのは、あんたたちの卑劣な催眠のせいなんだからっ……極太ちゃんぽをアナルの奥に突き立てられて、あっあつのせーし、いっぱい出して、アナルの奥までド口ト口にけがされたいなんて、魔法少女が、思っちゃいけないのに……想像しただけでぞくぞくしちゃってるっ♡」

「両方の指で、アナルをくばぁ、して見せるから」

「ほらぁ、こっうしてお尻を拡げたら、中までよく見えるのが興奮しちゃうのよね。変態っ♡ 変態なんだから♡ 媚びてるわけじゃないし、はぁ、はぁ♡ ちよつと気を使ってあげてるだけっ……息も荒くなってるっ!」

「だから、早く、おちんちんッ、勃起したデカチンポッ、中にお、おおッ♡」

「来たぁ、ぶつといのナマで、こ、これえ、これらのッ♡」

「熱くて、ぶりっぶりのチンポッ、わたしのお尻の穴に♡ ずっずっって♡」

「お尻の穴のお肉♡ 引きずり込んで♡ だめ♡ ぜんぜん違う♡ ゴムがないだけなのに♡ 熱さもぞくぞくもドキドキも♡ ダメ、これえ、だめえ♡」

「おっ♡ おお♡ おほおっ♡」

「ケダモノみたいな声ッ、出る、出ひゃうっ♡」

「おかひくなる、わたし、おかひくなっちゃうッ♡ 変態になっちゃうっ♡」

「ひあッ、パンッ、パンッ、お尻叩いちやダメッ、んおっ!? ごめんなしゃいっ、ごめんなしゃいっ♡ 魔法少女なのにな♡ お尻で感じてごめんなしゃいっ♡ ザ」戦闘員におちんちんおねだりして生アナルで喜んでごめんなしゃいっ♡」

「わたし変態♡ お尻の穴で喜んでじゃう変態だからぁ♡ ずぼずぼ突いて、よがらせてえッ♡ おほおッ♡」

「あ、あ、あああ♡ 奥で奥の方まで♡ 出すの♡ 出しちゃうの!」

「ザーメン、ナマでえッ、んあ、んああ♡」

「濃い精液い、お腹に直出しっすっひっ♡」

「そんなぁ、アナルに種付けされながらのピストン♡ 変態♡ 変態すぎて♡ わたしもイくの止まらないっ♡ お尻の穴、混ぜませされたっだけだっ、んお、んおおッ♡」

「せーし止まらないよう わたし、わたしが」ドームになっちゃうっ♡ せーしでパンパンに膨れた」ドーム♡ おほお♡♡」

「ひゅっひゅっへっうっ、来てるっッ♡ んおッ、んっおおーッ♡」

「あひ、あひああ……はぁ、はぁ、いっぱい出せわちゃったぁ♡」

「ふえ……ひゃあッー オチンポの栓、抜いたらだ、ダメえっー! せーしいっぱい詰っちゃうってるお♡ 抜いたら、抜いちゃったっ♡」

「あ、あ、ああ、んぴいつ!? あひあッ、精子っビュッビュウ♡」

「お尻の穴から噴水みたいにい……あへ、あへああ、見ないで!? 見られちゃうともつと気持ちよくなっちゃうの!? んひい♡ わたし変態だからお尻からせーし吹き出して♡ 見られるの気持ちいいの♡♡♡」